

国際子ども図書館における展示

国立国会図書館 国際子ども図書館 主任司書
本多真紀子（ほんだまきこ）

はじめに

国際子ども図書館では、2000年の開館以来、50件ほどの展示会を開催してきました。この中には、他機関との協力によって定期的に行っているもの、例えば、「絵本で知る世界の国々-IFLAからのおくりもの」などの展示会も含まれています。このほか、各資料室内の展示コーナーでも、随時テーマを設けて、小展示を行っています。

1 展示の位置づけ

ではまず、国際子ども図書館における展示の位置づけについて、お話しします。国際子ども図書館には、①児童書の専門図書館、②子どもと本のふれあいの場、③子どもの本のミュージアム、という三つの役割があります。開館当初、展示は、このうち②の「子どもと本のふれあいの場」であり、読書のおもしろさや図書館に親しむきっかけを与えるものとして、位置づけられていました。この役割を担う展示は、現在も、手にとって触れる本を使うIFLA展や、子どものへや・世界を知るへやでの小展示などで、続けられています。

その一方で、開館記念の第1回目の展示会「子どもの本・翻訳の歩み展」以降、回を重ねてきた300冊規模の大展示会は、大人が見ることを前提に組み立てられています。2005年の「国際子ども図書館の図書館奉仕の拡充に関する調査会答申」では、子ども図書館の三つの役割のうち、③の「子どもの本のミュージアム」の機能として、位置づけられました。大規模展示会では、各展示の見どころを紹介するギャラリートークや、関連するテーマの講演会も実施しています。また、展示会の開催には、日常業務の中で、様々な資料の内容をよく知り、テーマに応じた各種調査を実施し、有識者によるアドバイスを受け、さらに他機関との連携協力などが必要であるため、展示会は、それらの調査研究の成果発表ともなっています。これは、三つの役割のうち、残るもうひとつの役割である、①の「児童書の専門図書館」としての機能でもあります。

2 展示の現状

次に、現状についてお話しします。

国際子ども図書館では現在、4種類の展示を行っています。

(1) 企画展示

比較的大規模な企画展としては、「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見
る歩み」を開催中です。当館が所蔵する資料の中から、近代以降の代表的な児童文学作家・
画家の作品を、時代の流れに沿って、紹介しています。

開館以来、展示会専任の組織がないまま、年間3件ほどの企画展を開催してきましたが、
2009年、以後のシステム入れ替えや、2011年から2015年までかかる増築棟建設の準備な
ど、業務の繁忙が予定されたため、展示会業務の負荷軽減が必要となり、長期にわたり開
催する企画展の検討が始まりました。業務の効率化をはかるだけでなく、来館者の満足度
の向上、国際子ども図書館の認知度の向上と所蔵資料の利用促進も目指して、導かれたの
が、「日本の児童文学の流れ」というテーマでした。

展示会場は、特殊な構造です。中央に、直径およそ7メートルの円形の展示塔が二つ配
置され、この内周と外周にそれぞれ、円形展示ケースが設定されています。会場の壁沿い
には、四角形の展示ケースがあります。少々変わったこの配置を生かし、児童文学の通史
をわかりやすく、専門知識のない人にとっても面白い展示をめざし、どんな資料をどう見
せるか、児童文学の専門家の監修を受けつつ、およそ2年間の検討を重ねました。また、5
年に及ぶ長期展示となる為、陳腐化しない工夫も必要でした。

こうした検討を経て2011年2月から始まった展示会では、中央の二つの展示塔で、1999
年までの日本の児童文学の流れを5章に分けて紹介し、壁際のケースには、特別コーナー
として「童謡」「国語教科書と児童文学」「児童文学者」のテーマを設定して資料を展示し
ました。5章の内容は、第1章：『赤い鳥』¹創刊から戦前²まで—「童話の時代」、第2章：
戦後³から1970年代まで—「現代児童文学」の出発、第3章：1980年代から1999年まで
—児童文学の現在、第4章：現代の絵本—戦後から1999年まで、第5章：子どもの文学の
はじまり、です。特別コーナーの「児童文学者」は、半年周期で入れ替え、これまで6人
の作家：石井桃子、小川未明（没後50年）、谷川俊太郎、宮沢賢治、新美南吉（生誕100
年）、那須正幹を取り上げました。現在は、児童文学者シリーズを終え、中央展示塔で紹介
している1999年より後をテーマとして「21世紀の子どもの本 その1 絵本」を展示して
います。21世紀に入ってから、様々な形の絵本が出版されていますが、その中から、「赤ち
ゃん絵本の広がり」「国境を越えた絵本づくり」「3.11⁴以降の絵本」の三つのテーマをとり

¹ 1918年創刊の児童雑誌。鈴木美重吉主宰。芸術性の高い内容で、近代児童文学の成立期
に主導的な役割を果たした。

² 1945年

³ 1945年

⁴ 2011年3月11日に発災した東日本大震災を指す。

あげて紹介しています。これとは別に資料室で小展示を行っていますが、そこでもこれらの展示会と関連するテーマをとりあげることもあります。小展示については、のちほど(3)で説明します。

中央部分の展示は常設ですが、資料保存上の観点から、また、長期間に渡って資料を利用できないという事態を避けるためにも、可能な範囲で展示用複本を購入しました。さらに、復刻版を使ったり、雑誌であれば定期的に別の号と入れ替えたりしています。

ロングランの展示となったため、徐々に入場者数が減るのではないかという心配もありましたが、4年目に入った現在、1日平均の入場者数は、およそ200人で、この数は、開催時と変わっていません。なお、展示資料を手にとって読んでみたかったという要望も多く寄せられています。2015年の増築棟完成後に展開する新サービスでは、この展示で使った資料を新設の児童書ギャラリーに開架し、自由に手に取って読めるようにする予定です。

また、これらの展示に関連するイベントも随時、開催しています。児童文学者コーナーでとりあげた作家自身による講演のほか、監修者による講演や対談、展示の見どころを紹介するギャラリートークを行い、高い評価を得ています。これらのイベントは、できるだけ多くの人に来てもらえるよう、土曜日に実施しています。

(2) 他機関との連携による展示

2番目は、他機関との連携により、定期的に開催している展示です。毎年、決まった時期に開催するものも、隔年で開催するものもあります。今年度は、3件です。いずれも会期は1か月程度で、企画展とは異なり、展示資料は手にとって見ることができます。5月には、IFLAの「絵本で世界を知ろうプロジェクト」で集められた36か国、289冊の本を使った「絵本で知る世界の国々-IFLAからのおくりもの」を開催しました。この展示会は、昨年度から行っていますが、資料は、アジア各国、日本国内の図書館でも展示していただけるように貸出を行っています。昨年は、韓国で貴図書館と、インチョン市立スボン図書館でも展示会を開催していただきました。

今後の予定としては、国際児童図書評議会（IBBY）推薦の世界のバリアフリー絵本展、児童の福祉の向上や子どもたちの健やかな成長に役立てることを目的として厚生労働省社会保障審議会が推薦した絵本や図書の展示があります。

これらうち、世界のバリアフリー絵本展について説明します。この展示は、日本国際児童図書評議会（JBBY）との共催です。国際児童図書評議会（IBBY）の活動のひとつである「障害のある子どもたちの読書に有益な情報の収集と発信」のため、IBBYでは2年に一度、障害のある子どもの読書を助ける本の中から、数十冊を選んで推薦図書リストを作成しています。リストには、布絵本、点字や手話付の本、障害を描いた本などが含まれています。JBBYは、2005年から、これらリストに掲載された本の巡回展を行っており、当館も、これまでに3回参加しています。4回目の今年度は、今月末から約1か月、23か国の約60冊の本を展示する予定です。資料と展示用パネル、キャプション、DAISY再生機器などは、JBBYからの借用ですが、ちらしやポスター、展示資料リストは、当館で作成します。

手にとって、触ってみることのできる展示ですから、展示ケースは使いません。机とメッシュパネルを使って本を展示し、とくに注目してほしいポイント紹介のために、手製のポップアップをつけるなどの工夫をしています。

当館での展示が終わると、資料など一式は、次の会場へ送ります。「触れる」展示なので、壊れたり、なくなったりするものがないよう、次の会場へ無事に送り出すまでは、気が抜けません。常時会場に詰めている担当者が注意を払っていますが、展示班メンバーが時間を決めて見回りをし、期間中毎日、閉館後に点検整頓をして、多数の方に楽しんでもらえるよう努めています。

(3) 小展示

3番目は、館内に4つある資料室（大人向けの第一資料室・第二資料室、子どものへや、世界を知るへや）で、書架の一部を使って行っている小展示です。

このうち、子どものへやの小展示について説明します。この部屋は、誰でも自由に入出入りして資料を手にとることができ、約11,000冊の資料を開架しています。小展示としては、最大30冊程度を1か月から3か月展示する企画テーマ展示を2種類と、週単位で展示替える数冊の展示を2か所で行っています。企画テーマ展示については、ホームページでも紹介しています。

この展示の目的は子どもと本をつなぐことで、具体的には以下の4点です。

1. 本の表紙を見せて置くことで、子どもが選びやすくする。
2. 親しみやすいテーマを設定し、子どもと本をつなげる。
3. 絵本、読物、昔話、知識の本、詩など様々なジャンルの本を展示し、子どもが新たな興味を引くよう配慮する。
4. ふだん手に取られにくい本を子どもが手に取る機会をつくる。

まず、テーマを展示替えの3か月くらい前に決めます。テーマの選定には、季節の事柄の中から例えば「入学」など、子どもに身近な事例を選ぶ、普段からストックしておいた紹介したい本から共通テーマを探す、子ども図書館で開催している行事に関連させる、などの方法があります。テーマ設定にあたっては、子どもに理解でき、受け止められるかどうか、十分な冊数を揃えられるか、といったことに気を付けています。テーマが決まったら、次は選書です。展示資料点数の2倍を目安に、各種ブックリストやOPACから、テーマに合いそうな本を選びます。他の職員にも意見を聞きます。候補が集まったら、現物を見ながら、展示資料を絞り込みます。絞り込みに際して注意するのは次の点です。フィクションではタイトルと本の内容が異なることもあるので、必ず内容に目を通す、対象年齢のバランスがとれているか（幼児向け、小学校高学年向けなど、幅広く選ぶ）、作家、ジャンル、国や地域に偏りがいないか、季節外れになっていないか。こうして、展示本が決まったら、リストを作成し、子どもが読むことを前提に、それぞれの本の紹介文を書きます。また、ポップアップをつけたり、子どもの目をひくあたたかみのある看板を設置したりしています。

展示には、子どもと本をつなぐという目的の他にも以下のような効果があります。

1. 作成した展示リストは、ジャンル別の本の紹介などカウンターでのレファレンス業務にも使用できる。
2. 国際子ども図書館ホームページにリストを掲載しているのもので、他の図書館での展示の参考になる。
3. 展示替えの際に、館内職員向けに説明会を実施している。そのため、直接児童サービスに従事する職員以外にも、展示資料やそれにまつわる子どもの反応を知ってもらえる機会となっている。
4. 開架資料を特定のテーマという枠組みの中で読み直すことで、視野が広がり、資料をより深く知ることができる。

来館した子どもに本を紹介するために話しかけると、緊張する子どももいますが、このような資料を紹介する展示があると、看板や本の表紙を見て、自ら本を選ぶことができます。

(4) 電子展示会

4 番目は、当館ホームページで公開している電子展示会⁵です。現在、6 件のコンテンツがあります。

このうち、「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」⁶を紹介します。館内の現物展示をもとに、インターネットを通じていつでもどこからでも見られるよう、電子展示会として再構成し、今年4月23日から公開しています。資料の画像（主に表紙）にキャプションを付し、当館のデジタル化資料がある場合は、デジタル化資料を閲覧できるシステム⁷へのリンクを張って、本文も読めるようにしました。児童文学関連年表や参考文献一覧も掲載しています。画像の掲載にあたっては、著作権者からの許諾を得ています。

電子展示会での問題は、現物展示で使っている資料や本文リンク先資料との版の違いです。例えば、電子展示では初版を使っているのに現物展示は復刻版という例、電子展示も現物展示も異版を使っているのに本文リンク先は初版という例などがあります。理想を言えば、電子展示の画像はすべて初版にできればよいのですが、当館に所蔵がないケースや、掲載のための許諾を著作権者からあらためてとり直さなければならない、といった問題があり、今後の検討課題となっています。また、現物展示において特別コーナーで展示している資料は、まだ電子展示会では公開していませんが、今後追加していく予定です。

(5) 広報

最後に、広報についてお話しします。展示会の開催が決まると、ポスターやちらしを作成し、館内各所に掲示するほか、報道機関や関係機関にも配布をお願いしています。最寄駅

⁵ <http://www.kodomo.go.jp/event/gallery/index.html>

⁶ <http://www.kodomo.go.jp/jcl/index.html>

⁷ 国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/>

と当館の間にある上野公園は、美術館、博物館が集まる一大文化ゾーンで多くの人が集まる場所ですが、その看板にも大きなポスターを設置しています。さらに、ホームページ、メールマガジン、当館刊行物も活用しています。アンケート結果を見ると、当館以外の場所でポスターやちらしを見て知った、というケースが多く、やはり、直に視覚に訴える紙媒体の威力は大きいようです。ポスターやちらしのデザインは、イメージを伝えて外部に委託することもあり、職員が手作りすることもあります。本の表紙画像などを使う場合は、著作権者の許諾をとっています。苦心して作り上げた展示会ですから、できるだけ多くの人に見ていただきたいと思っています。

3 最後に-今後に向けて

十数年の経験を経て、課題も見えてきました。

ひとつは、業務体制です。300冊規模の企画展を、10年間で30回以上開催し、講演会などの関連イベントも実施して来ましたが、展示会専任の係はありません。各課からメンバーを出し、展示会ごとにチームを編成し、専門家の監修を受けつつ、ルーティンワークにプラスして、実施して来ました。そのため職員の負担が大きいのが問題です。作業スペースも十分ではありません。来年度、増築棟が完成する機会に改善できるよう、検討を進めています。

次に、資料保存上の課題もあります。主な展示会場となっている3階のミュージアムの設備は、十分な温湿度管理ができず、長期の展示では、資料に大きな負担がかかっています。設備の改善は難しく、展示用資料の購入も進めて来ましたが、展示期間や複製版の利用などの工夫がさらに必要です。

また、公共図書館等への支援としては、バリアフリー展などの巡回展において、資料リストや解説の提供を行っているものの、日本では図書館という場での大規模な展示会自体がそもそも想定されてこなかったという状況もあり、公共図書館等から何を期待されているのか何ができるのか明白とは言えず、手探りの状況です。

展示会開催にあたっては、日ごろから資料に精通していることが必要ですが、何よりもそのテーマに関心をもつ、ということが大切に思われます。また、芸術的センスも求められます。しかし異動も多く、展示会開催に必要なノウハウの蓄積が難しいのが現状です。この点は、児童文学や絵本などの専門家を招いて説明聴取会を行ったり、監修をお願いしたり、専門資格を持つ非常勤職員を配置するという形で補ってきました。人材育成もまた、今後の課題です。

国際子ども図書館の3つの機能のうちの一つである、ミュージアム機能について説明しました。ミュージアム機能はそれだけで単独であるものではなく、児童書の専門図書館としての機能、子どもと本のふれあいの場としての機能と密接に関連しています。それぞれの機能による相乗効果が出るように更なる工夫が必要と考えています。

ありがとうございました。